

認知症御本人及び介護家族へのヒアリングの実施状況について

○認知症施策推進基本計画では、認知症の人及びそのご家族の参画を得ながら、意見を聴き、対話を重ね、認知症の人とともに施策を立案・実施・評価していくことが求められています。

○本県においても、認知症の人やご家族の思いや意見を施策の検討に反映するため、令和7年度からヒアリングを実施しています。令和8年7月末時点で計11回（御本人7回、御家族4回）延べ49名（御本人27名、御家族22名）の当事者からお話を伺いました。

	御本人		御家族		実施場所					合計	
	実施回数	人数	実施回数	人数	本人交流会	家族交流会	家族の会	認知症カフェ	県事業（社会参加）	実施回数	人数
令和7年度 （12月～3月末）	3	13	2	11	2		1			5	24
令和8年度 （7月末時点）	4	14	2	11	1	1		3	1	6	25
計	7	27	4	22	3	1	1	3	1	11	49

<ご本人のお話>

○認知症への理解

- 「認知症の症状も人それぞれいろいろ。できないことばかりにばかり目を向けられている」
- 「認知症の人が楽しい生活を送れていることや、認知症になっても、長く続けられることなどを伝えて認知症の認識が変わるような発信をしてほしい」

○社会参加

- 「交流会に行くのは心の健康」
- 「内職みたいなことができる集まりがあるといい。お金は大したことなくても、そういう場所がもっとあるといい」
- 「各企業に対して、認知症の人でもできることがあるというのをアピールしてほしい」

○支援・サービス

- 「認知症ケアパスは、地獄のケアパス、重度になると寝たきりで…。あんなのいない。ほしいのは、これ以上ひどくならないためにはどうするといったこと」

○相談体制

- 「本人ミーティングや認知症カフェなど共感してもらえる場所は大事」
- 「認知症の診断をされて、4年後に包括を知った。（地元の）包括は、サービスにつながらないと相談にのってもらえなかった」
- 「家の近所でも同じような風景が続くと、道に迷いそうになる。近所に自分のことを知ってくれてる人がいると安心」
- 「認知症と診断されて不安だった頃、どこか行ける場所はないかと、自分で認知症カフェを探して行った」

<介護家族のお話>

○孤独感、周囲の理解

- 初めは介護に燃えていた。辛いことを吐き出せない自分がいた。辛いことを分かってくれる人はいないといつも感じていた。
- (周囲は)家族が介護をやって当たり前と思っているので、実際に施設に入った後も、近所の人に色々言われて辛かった。
- 社会は、家族は黙っているのが当たり前、特にお困りのことはありませんねみたいな形で回っている

○介護負担

- 「初期は、とにかく物忘れがすごかった。電話が鳴りっぱなしで何度何度も同じことを聞かれ、気力も時間も奪われていた」
- 「予定は直前でないと本人には絶対伝えられない。前日に伝えてしまった時、何度も予定を聞かれ、寝ていても起こされ、トイレに隠れて耳をふさいだ」
- 「排せつの失敗で、部屋中が汚くなる。ケアマネの辛さを打ち明けたら、「大丈夫、もっと大変な人もいる」と言われて打ちのめされた」
- 「ちょっとしたことですぐ怒り、出ていく。途中で止めても聞かない、信号も無視。おかしくなったら、すぐ尾行する準備をして、朝も夜も暑い日も寒い日も追っかけた」

○支援・サービス

- 「ピアサポートの会に出た時、家族が話をすると、すぐに専門職が「解答」を伝えていたのでそれ以上話ができず、また、介護者同士の交流もできず、消化不良になった」
- 「家の鍵とスマホに GPS を付けているが、本人は自覚なく、GPS をぎゅっと強く握って電源を切ってしまう」
- 「施設に入所するまでは、デイサービスやショートステイを利用していたおかげで自分自身が倒れることなく、自宅介護が続けられた」
- 「介護の仲間がいたからずっと乗り越えられてきている」

○相談体制

- 「交流会は同じ経験をしてる人がいるから、話すとわかってもらえるのが良い」
- 「色んな選択をしなければならない場面では、実際に介護をしていた家族の話が一番何かを決定するときの材料となった」

○就労

- 「働きたいという気持ちはあるが、母からの電話が頻繁で仕事をしていてもすぐ対応しないといけないと思うと(会社に)迷惑をかけてしまうので、なかなか一歩が踏み出せない」